事例紹介

地域融合型ゲストハウスで外国人観光客の誘致とまちづくり

株式会社宿場JAPAN 代表取締役社長
渡邊 崇志

私は「宿場JAPAN」という会社で代表をしています渡邊と申します。

「『宿場JAPAN』って何？」と思われる方もおられると思いますが、本当の職業というのは旅館の館長みたいな感じです。

今回はこの「宿場JAPAN」の取り組みについて紹介します。

ゲストハウスがつなぐ人と未来

まずは私自身の自己紹介ですが、高校までに家業を継ぐか家を出るかどっちかにしろという決断を迫られたんです。それでホテルマンになりたいという漠然とした思いで一人暮らしを始めました、高校３年生の夏から。

大学では奨学金をもらいながら、バイトばっかりしていたら、やたらお金が貯まって。家賃も払ってまだお金が余るから、じゃあ旅しようかなって旅に出たんです。

カバン一つであちこち行くバックパッカーとして、15か国ほど一人旅をしました。いろんなホテルを泊まり歩いたんですけど、結局自分に合うホテルというのは、安いホテル。もちろん安くてリスキーなところもかなりあるんですけれども、宿主さんや地元との交流がものすごく密になる――現地の人とふれあう機会があって、あ、これはおもしろいと思いました。アジア全般を旅したんですが、こういったホテルを「ゲストハウス」と呼んでいるようです。

ゲストハウスでは旅行者同士の情報交換・交流も密に行われています。実は、中国に短期留学した際に仲良くなった友人がアメリカ人と結婚しました。その彼の友人のアメリカの家にホームステイさせてもらいながらアメリカで語学を学んできました。経験が経験を生むんです。

その後、日本でこういう宿をやってみたい、そんな思いを抱いて帰国しました。

地域に根差した宿づくり

旅から帰って、じゃあ具体的にやるにはどうしたらいい、と考えていたときにふと思い出したのが、祖父の外国人に対する感情。勉強好きで歴史好き、優しい祖父だったのですが、歴史的な経緯もあってか、良くない感情を抱いていた。でもその孫である自分は彼らと一緒にお酒を飲みながら楽しく話をしている。外国人に対する価値観が世代によって違っているんです。

なんの気なしに海外で友達をつくって帰国できて、「今何してるの」なんてメールをすぐ携帯で送れてしまうような時代の自分たちしか気づかないことがあるんじゃないか。地域で何か取り組むことで、価値観をちょっと変えられないか。

そういうことをやるのは、もう自分たちしかいないというような使命感が出てきたんです。地域に根差した宿をやろう、と。

そしてそのゲストハウスの館長が、バックパッカーと地域や子ども、商店をつなぐ役割を果たせないだろうか。共存し合う共通点のようなところにはなんとなく人のうれしい気持ちみたいなものがあるから、お互いうまく満足できるのではないか。こんなことを模索しながら、第一歩を踏み出しました。

最初に一人暮らしを始めた第二の故郷・品川で事業を始めようと、まずは、昔住んでいたアパートの自治会長に相談をしました。

「だったらこの人に相談してみろ」と紹介を受けながら３人ほど介して、まちづくりの会長のような人に会えました。

もう20年以上旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会としての活動をされていた人で、「昔からこういうのをやりたかった」と、いろいろな人を紹介してくれるだけでなく、修行先もアルバイト先も紹介してくれました。

１年弱ほどこのまちづくり活動をひたすらやったんです。お祭りの片づけとか、町会行事の手伝いとか。そういうところで顔がつながって、役所に事業のプレゼンに行ったときも話がすごくスムーズでした。いろんなつながりがあって、この旅館の物件自体も役所に紹介いただきました。

宿も外国人も地域も満足できる環境を

品川宿では、１年に約53か国、延べ5,000人ぐらいの人が宿泊しています。多くの人が実にさまざまな要望を出してきます。例えば「こういうことをやりながら生活したい」「日本にふれたい」「スタッフとコミュニケーションをとりたい」など。

自分たちではまず「祭りを世界発信しよう」と決めまして、まずは北品川２丁目でやっている「そば打ち祭り」をFacebookやTwitterで世界発信したんです。旅館のサービスとしてはいっさいお金をかけていないのに、「この宿に泊まるとお祭りがついてくる」という付加価値のように。移動動物園のお知らせや、流しそうめん祭り、ちびっ子祭り、品川汁試食会といろいろ情報発信しています。

法被姿で颯爽と

地元の人と流しそうめんを楽しむ

もちろん、勝手に情報を発信するだけではなく、お祭りに外国人も参加できるように、地元のニーズを拾って、そのニーズに外国人をつなげようという取り組みをしています。宿全体であらゆるまちの会議――町会の打ち合わせ段階のものから、商店街やまちづくり協議会、掃除の会など――に片っ端から出ていって。

その結果、お祭りだけではなく、近隣の旅館や、居酒屋、ラーメン屋などにもうちの宿から外国人を紹介でき、なんとなく全員が満足できる環境づくりにもつながっています。

そのほか、品川は空港からのアクセスが非常にいいんです。特に外国人旅行者は、一部乗車できないものもありますが鉄道やバス、フェリーで利用できるJRのジャパンレールパスを使って日本全国旅行されるようなんですが、最初はやっぱり空港から入国されますよね。

最初に１泊してもらう際、うちの宿からは日本でのマナーや日本国内のおすすめスポットなどの情報を紹介する。全国を巡って帰国する前日、またうちの宿に宿泊した際には旅行客から最新情報が宿に蓄積される。

こうして日本全国の宿との情報交流も進めています。

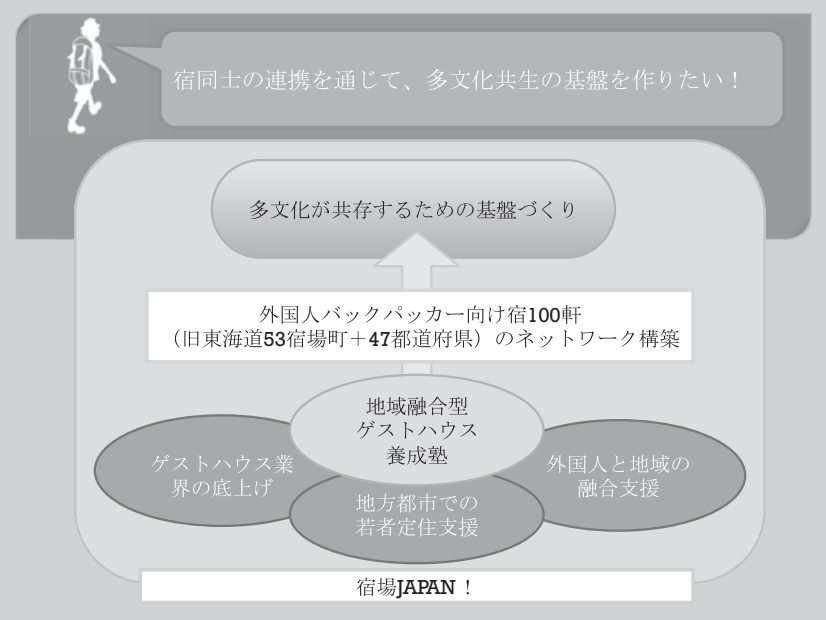
目指すはゲストハウス100軒

平成22年12月に事業年度２年目が終わって、いよいよ本当に会社としてやっていこうというところで、こういう宿を日本全国につくれたらおもしろいんじゃないかなと考え始めました。

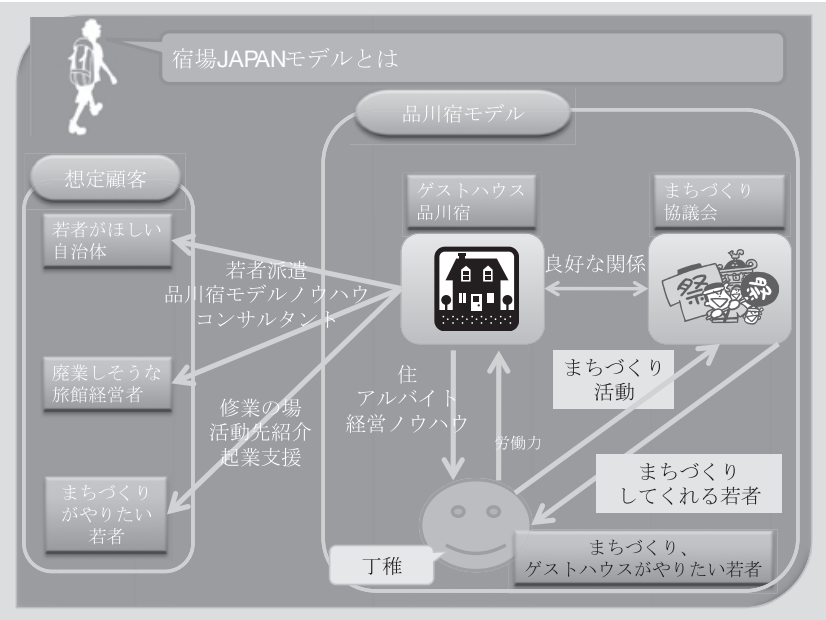
たくさんの文化が混在している中で、外国人からの要望を整理して、まちとつなげていく。多文化共生、共存するための基盤づくりを行う場として、旧東海道五十三次プラス47都道府県で、100軒の宿づくりを目指しています。

実は、自分と同じような世代で、同じような思いを持っている人がいっぱいいるんです。

宿場JAPAN「多文化共生基盤づくり」



宿場JAPANモデル



月に何人も「こういう宿やりたいんです」という人が来る、まちづくりのシンポジウムに行くと、そこでは若い人が活動している……。

私自身の経験をネタにすることで、地方で宿をやりたい若い人がやれるチャンスがあるのなら、やりたい人を応援して、そのまちのおじさんとつないでやれるようなことができないかなとプロジェクト化したのが宿場JAPANです。

まだまだぼんやりとしたところなんですけども、地域融合型のゲストハウスを立ち上げるまでには、宿をやりたい人自身の「やりたい」という動機だけではなかなかたどり着かない。物件を探すために、不動産屋ではなく、まちの人の活動に飛び込んでいって、そこから自治体やさまざまな地域団体と知り合い、地元の人とのつながりをつくるところから始める。その中で地元のニーズを把握していく。

地元で応援してくれる人、資金、物件、地域社会との友好な関係などを整えた状態で始

めないとビジネスが成り立たないんです。事業計画まで品川宿で修行している間にきちんと立てられるようにできないのかを模索しながら進めています。

特に物件については、売りに出ている旅館情報を持っている自治体やまちづくり団体と、宿をやりたい若者をうまく結べないだろうかと大々的な告知を続けながら動いている状態です。

Detti第1号の巣立ち

実は宿場JAPANのホームページをきちんと作り始めたのが平成23年４月ぐらいだったんですが、さっそく何人か修行の応募がありました。彼らを“Detti（デッチ）”と呼んでいます。

Dettiが品川で修行するというモデルで、オープン直前まで来ている女性がいます。

長野県須坂市は、「蔵のまち」としてよく整備されているんですが、ここに何かが足りないとDetti第１号として参加してきました。

彼女自身は海外で２年間日本語を教えた経験を持っています。出稼ぎにきたスリランカ人と結婚し、生まれ育った須坂で旗揚げしようと外国人旅館経営を考え始めたそうです。

連絡をもらって須坂に行ってみると、蔵を中心とした街並みが美しく、観光客も集まりやすく、これはいける、と彼女の３か月の修業が始まりました。

彼女はもう本当に品川でも有名人になりまして。レストランで新しいメニューを作ってしまったり、地域に眠っていたお茶の先生を引っ張り出して子どもたちと外国人のお茶教室をやってみたり、お祭りで外国人に神輿を担がせてもらえるよう、氏子の皆さんと交渉に出かけたり。こんな修行生活を通じて、地元に帰ってからの地域の人とのつながり方が勉強できた、と彼女は言います。

Detti修行も楽しく！

事業計画まで作り上げて彼女は須坂に帰りました。

すでに一度不動産屋を巡って「このあたりには古くから住んでいる人が多いので物件は貸せません」と言われていた彼女ですが、Detti修行をスタートしてから、まずは地域の人々とのつながりをつくるところからスタートしました。

彼女の品川宿での修行２期目には、物件が見つかったという電話が鳴りっぱなし。きちんと筋道を立てて地域とのつながりを築いていけば、皆さんものすごくバックアップしてくださるんです。

地域融合型ゲストハウス「蔵（仮称）」は、内装を彼女たち自身でやって、平成24年４月オープン予定です。

最後に品川宿、そして宿場JAPANとしての活動ですが、これは365日毎日やっています。メディアの取材もかなり来ていただけている状態ですので、そこでの発信する力だったり、Facebookやmixi――自分自身は非常に苦手なんですけど、本当に小さな情報でも発信されそして反応が返ってきているんです――などを使って情報発信に努めたいですし、皆さんにもぜひ使っていただければと思います。

略歴：
渡邊 崇志（わたなべ・たかゆき）
幼いころからの夢はホテルマン。学生時代の大部分を、ラグビー、ホテルでのアルバイトとアジアを中心としたバックパックトラベルに費やした。約４年の社会人経験を経て、渡米。帰国後、長年住み慣れた品川で、旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会に参加した。2009年10月にはまちづくり協議会のバックアップを得て、外国人バックパッカーをターゲットとした安価な素泊まり宿「ゲストハウス品川宿」を開業。現在に至る。